ドライアイスの短剣

（騎士（リッター）別伝）

ＫＧＫ著

Dry-ice Dagger

(Another-Side Story of ‘Ritter’)

written by KGK

Copyright ©1998, 1999 by KGK

1

「全く、障碍者には生き難い社会だ」

パウル・フォン・オーベルシュタインはつぶやいた。彼は三度目の義眼移植手術が終って、夏休みを利用して別荘でリハビリをしているのだ。彼は一度目の手術を覚えていない。それは彼が一歳の頃のことだそうだ。二度目は幼年学校に入る前。三度目がこの夏、幼年学校での最後の夏だった。

医師の話によると、今回入れた義眼は大人になっても使えるため、ありがたいことに当分手術しなくてもよいそうだ。二〇年もすれば調子が悪くなるが、適切な整備をすれば視力には影響がないという。

パウルの目が悪いのは、実は先天性の異常なのだが、表向きは出産時の事故ということになっている。彼の父から医師に多額の金が流れた結果だ。パウルにしてみれば、生まれた時から嘘を背負わされたということで、はなはだ迷惑な話なのだが、そうでもしなければまともに生きていけないことも理解出来る。生まれた時に「処分」されなかっただけでも、まだましなのだ。つまりは、そういう社会なのだった。

たとえ事故だということにしても、この社会は障碍者にきびしい。父に幼い頃から聞かされていたように、軍人にでもならなければ出世の望みは無い。だから彼は幼年学校に通うことになり、士官学校へ進学することが望まれている。

「人殺しのプロになるよりもまともなことをしたいものだ」

そう思わないでもなかった。もともとパウルは医師になりたかったのだ。彼の目の手術をした医師は、金には汚ないが腕は一流だし、パウルの「嘘」の共犯者であるにしても恩人であることには変わりがない。パウルが最も尊敬する者の一人であった。

しかし、パウルが医師になったとしても、この社会では義眼の医師に診てもらおうとする者はほとんどいない。たとえそれが肉眼よりも性能の良い義眼であったとしても。如何に理不尽であろうとも、それがパウルを取り巻く現実であった。

「どうせ軍人になるのなら……」

誰にも言えない暗い野望を持ち始めたのは最近のことだった。

2

リハビリといっても、特にすることがある訳ではない。ある日、暇を持てあましたパウルが別荘の裏手にある湖畔の森を散歩していたときのことだ。

「リッター、早く来なさい。置いて行くわよ」

「はーい、シュザンナ様ぁ」

一人の可憐な少女と一人の少年がパウルの視界に入ってきた。パウルは思わず木陰に隠れてしまった。

「なんで、隠れなきゃいけないんだ？」

そうは思ったが、一度隠れた以上、のこのこ出て行く訳にもいくまい。パウルは木陰からそっと様子を窺った。幸い（かそうでないのか）二人はパウルに気付いてないようだった。

「全く、リッターったら愚図なんだから。お前が別荘で退屈してるから、こうやって連れ出してあげたんでしょう？きょろきょろしてないで、さっさと来なさいよ」
「申し訳ありません、お嬢様。あんまり景色がきれいなものですから」
「つべこべ言ってないで。さあ、こっちよ」
そう言って少女は、パウルのいる木陰を真っ直に見た。そしてパウルを見付けたらしく、にっこりと笑ったのだ。パウルは、彼としては最大限に素早く、木の陰に完全に隠れた。
「み、見つかった。どうしよう」
どうしようもこうしようもない。見つかったのなら普通に挨拶すればよいだけの話なのだが、動転してしまったパウルはそれに気がつかなかった。挨拶しようとした相手に隠れられてしまった少女は（パウルから見えるはずのないことだが）立ち止まって首をかしげた。
「どうなさいました、シュザンナ様？」
「……、何でもないわ。帰るわよ」
「えーっ？　あっちへ行くんじゃなかったんですかぁ？」
「私に口ごたえする気？」
「い、いえ、滅相もございません」
声が段々遠ざかって行った。少し安心したパウルは木陰からそっと様子を窺った。ところが、その瞬間を察知したように少女が振り返り、あっかんべーをしたのだ。
「お、お嬢様？」

「うるさい。何でもないったら何でもないの。だいたいお前は……」

再び隠れたパウルは、声が届かなくなってからも、たっぷり一時間の間そのまま凍りついてしまった。

3

古今東西を問わず、胸の鼓動が高なったときに異性が目の前にいれば、それを恋だと認識してしまうことはよくあることだ。どきどきする原因がたとえ驚愕であっても恐怖であっても、そんなことは関係ない。世にいう「一目惚れ」とは、その大部分が実はそういうことなのだ。パウルもこの場合は、愛すべき多数派に属していた。パウル・フォン・オーベルシュタインの、これが初恋であった。

「シュザンナ」

その名前には聞き覚えがあった。この森の向こうにはベーネミュンデ子爵家の別荘があるはずだ。子爵にはパウルと同じぐらいの歳の令嬢がいて、その名が確かシュザンナ。

リッターという名前には聞き覚えが無かった。別荘に帰って子爵家の名簿を調べてみても、それらしい名前は載ってなかった。しかし、年格好が該当する者が一人いた。召使いヨハン・セバスチャン・フォン・ワイツェッカーの息子カール・フォン・ワイツェッカーがそうだ。

「あの男、ほとんどペット扱いだったな。本人は気がついてないのだろうが」

パウルは口元だけで笑った。

実は、たとえペット扱いでもシュザンナの傍にいられる少年の立場をうらやんでいるのだが、パウル自身はそれを気付いていなかった。

それはさておき、パウルはシュザンナの情報を集め出した。情報収集は彼の得意分野だった。写真、生年月日、星座、血液型、趣味、好きな男性のタイプ、……、パウルの手にかかれば、集められない情報など無かった。

しかし、パウルにはどうしても出来ないことがあった。シュザンナに直接会うことである。人との付き合い方を知らないパウルは、どんな口実で会えばよいのか、会って何を話せばよいのか、見当もつかなかった。

「所詮、俺もこの程度の男か」

そうつぶやいて、それっきりあきらめてしまうパウルであった。

4

やがてパウルは士官学校を受験し、実技はともかく学科は優秀な成績で合格した。シュザンナのことはときどき思い出したが、会うことも連絡をとることもなかった。士官学校では、まず優等生と言われてもおかしく無い程度の成績は残せた。特に情報分析、情報工作、組織運営等の分野では目を見張るものがあった。生活の方はというと、まあ平穏無事と言えるものだった。少なくとも入学してしばらくの間は。

「パウル・フォン・オーベルシュタインとは君のことですか？」

ある日、そう呼び止められた。

振り返ると、そこにいたのは、あの日シュザンナと一緒にいた少年だった。パウルは言葉が出ない程驚いたが、それは表情には出なかった。

「あ、失礼。僕はカール・フォン・ワイツェッカー。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

そいつの話を聞いてみると、要はそいつの唯一の得意分野でパウルが一番をとってるのが目障りらしい。いろいろ理屈をこねてるが、結局はそういうことなのだ。

実は、カールは幼年学校を出ていない。なのに何故士官学校に入学出来たかというと、ベーネミュンデ子爵の力である。貴族社会では往々にして起こることだ。しかし、いくら大貴族のコネがあっても、成績が基準を満たさなければ進級出来ない。四苦八苦してなんとか及第点をとってきたカールの唯一の取り柄の前に立ちはだかったのがパウルという訳だ。

あれこれ議論をふっかけてくるのを適当にあしらっていると、カールはパウルの言葉にいちいち感銘を受けていた。そうこうしているうちに、パウルはカールにすっかりなつかれてしまい、毎日のように議論をふっかけられるようになってしまった。

5

最初のうちはカールのことをうっとうしく思っていたパウルだが、カールが意外に頭が良いことに気がつくと、自分からも議論のネタを提供するようになった。

彼が劣等生なのは知識が足りないからであって、頭の出来は悪くはなかったのだ。カールはパウルの知識を水が砂にしみこむように吸収していった。

「君との議論は、一年分の講義より為になるよ」

しばしばカールはそう言った。これはカールが講義をろくに聞いてないだけのことなのだが、確かに彼にとってみれば、講義よりパウルとの議論の方がはるかに身になっていた。

パウルがカールとの会話を好むようになったのはもう一つの理由がある。カールの話の中にシュザンナが頻繁に登場するのだ。カールの口からシュザンナの話題が出ると、何やら腹立たしいような、それでいてもっと聞きたいような、妙な感情をパウルはいつも抱いてしまう。

カールはそんなことに全然気付いていない。基本的には脳天気で鈍感で人の好い奴なのだ。もっとも、いつも無表情なパウルの感情に気付けというのは酷というものだが。

脳天気と言えば、カールはどうやらシュザンナが自分のことを憎からず思ってると信じているようだ。カールがシュザンナに恋をしてるのは言うまでもなく分かるのだが、その逆は……。

パウルがあの日見たところによると、さすがに憎くはないだろうが恋でもない、ペットに対する愛情と大差はない。今頃は犬にでもカールだかリッターだかの名前をつけて可愛がっている気さえする。もっとも、これはパウルの願望なのかも知れなかったのだが。

どちらにしろ、そんなことを口に出して友人の機嫌を損ねる程パウルは馬鹿ではなかった。

6

ある日、カールが何時になく真剣な表情で話しかけてきた。シュザンナが皇帝の後宮に入るというのだ。パウルは眩暈がする程の衝撃を受けたが、もちろん表情には出さなかった。シュザンナ救出に知恵を貸して欲しいというカールに、パウルはやっとのことで返事をした。

「君は君の道を行くがいい。私は私の道を行く。当分、会わぬのがよいだろう」

カールがその言葉をどう受けとめたか心配だった。しかし、頭の良い彼のことだ、すぐに理解するだろう、そう自分を納得させてカールと別れた。

この事件が自分の計画にどんな変化を持たらすか、パウルは子細に検討してみた。結局、ゴールデンバウム王朝を打倒する理由が一つ増えただけだ、そう結論づけて、計画の変更はしなかった。

それっきり、パウルはカールのこともシュザンナのことも念頭から追いはらった。少なくとも、追いはらったつもりではあった。

その後、カールは姿を消した。パウルは士官学校を無事卒業し、軍人としての道を順調に歩み始めた。様々な思いを無表情の奥に押し込めたまま。

7

それから、一〇年を悠に越える歳月が流れた。その間、行方をくらましたカールのことは、パウルはあえて探さなかった。シュザンナのことも風の噂で聞くだけに留めていた。

パウルの義眼の調子が悪くなり始めたころ、パウルのもとに匿名の小包が届いた。中にあったのは分厚いファイルとメッセージ・カード。「リッター」とだけ署名されたファイルにはラインハルト・フォン・ミューゼルに関する詳細な情報が入っていた。彼とはいずれ接触するつもりだったパウルにはありがたい情報だった。

メッセージ・カードに入ってたのは、カールからの遺書ともとれるメッセージだった。カールはシュザンナと共に滅びることを選んだようだ。満足しているようなことを言ってるが、無念は隠しようがない。結局シュザンナを救うことも、仇を取ることも出来なかったのだから。

カール。シュザンナ。とっくの昔に忘れたはずの名前だった。しかし、いつでも心の片隅にあった名前だ。二人を助けることは、今のパウルには出来なかった。パウルに出来るのは、カールの作った組織の一部とカールの思いを引き継ぐことだけだった。

義眼でも涙を流すことが出来るのだということを、パウルはその日初めて知った。

おわり